



TITLE:

総括(特集 シンポジウム「ホミニゼーション」II)

AUTHOR(S):

渡辺, 直経

CITATION:

渡辺, 直経. 総括(特集 シンポジウム「ホミニゼーション」II). 霊長類研究所年報 1974, 3: 91-92

ISSUE DATE:

1974-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162475>

RIGHT:

Ⅲ 総 括

渡辺 直経（東大・理）

突然の指名で、しめくくりにはならないと思いますが、一言述べさせていただきます。今回は「発達」、「言語・コミュニケーション」、「脳神経」の3つのテーマについて、昨日から講演と討論が行なわれましたが、ホミニゼーションの問題には、いかに多方面からのアプローチが必要であるかを痛感しました。

発達の部では、それぞれの講演はいずれも有益でしたが、同じく発達といっても、歯冠形態の発達と社会行動の発達とは、いささか異質のものの組合せという感じをうけました。

発達というと、進化も、発育や成長も、生活技術や社会構造の発展も、広くとればみな含まれてしまいます。どれかにしぼるか、さもなければ、異質なもののでも相互に何らかの関係があるとか、対比ができそうな事柄を組合せれば、もっと議論が噛み合って効果があがると思います。

言語は人類のコミュニケーションの媒介としてばかりでなく、思考の法則の普遍性を示す点でも重要な意味をもっていますが、コミュニケーションそのものは人類以外の動物でも、いろいろの形で行なわれているわけです。抽象能力と抽象概念を記号化して表出する能力が、ホミニゼーションにとって特に重要ですが、人類が音声によって無数の記号を表現できるのは、多種多様な有節音を発することのできる口腔や咽喉部の解剖学的な構造や、発音発声に与る諸器官の筋肉を支配する神経の微妙な協調によるものです。これは人類の直立二足歩行に伴う解剖学的構造の変化や、長い発育期間に直立二足歩行するために捧げられる、筋肉と神経との協調の訓練に負うところが少なくないと考えられます。今まで、チンパンジーに音声による言語を教えこもうとする試みが、うまくいっていないのは周知のことですが、先ほどの講演で紹介されたように、チンパンジーに視覚による記号表出の能力があるということは、極めて注目すべきものと思います。

ただ、このようなことと関連して、日ごろ感じていることを申しますと、一つはチンパンジーにそうした能力があるということと、それがチンパンジーの生活にどのような寄与をしているかということとは、別問題であろうということです。例えていえば、土器の発明は新石器時代に穀物の栽培と結びついて、人類の生活に画期的な発展をもたらしましたが、土を焼けば固い焼物になることは、後期旧石器時代の焼いた土偶や、中石器時代に粗

雑な土器があることから、すでに古くから知られていたことが分ります。最古の土器がいつどこで作られたかを知ることも、無論意義のあることには違いありませんが、それよりも重要なのは、いつどういふ風に土器がその効用を発揮して、人類の生活に重要な役割を果たすようになったか、ということではないでしょうか。これと同じように、チンパンジーに視覚言語の潜在的な能力があるということが解ったことは重要ですが、もっと重要なのは、そうした能力が果たして実生活においてどのように働いているのか、ということだろうと思います。

これと関連してもう一つ指摘しておきたいのは、チンパンジーのそうした能力は人間の関与によって引きだされた、ということです。人間が与えた条件づけによる学習によって、チンパンジーはそうした能力をあらわすようになったので、人間の関与がなければ、自然の状態では自らそうした能力を発揮することはないのではないかと。十何年か前に幸島のサルを見学に行きまして、いわゆるイモ洗いとかムギの洗別など、その頃有名になったサルの行動を見て驚いたのですが、こうした特異な行動は、研究者や飼育者との接触の下で現われたものです。いわゆる自然状態でこういう特異な行動が生れるならば、各地の野生ニホンザルの集団でも、さまざまな変った行動が見られていいはずですが、それほど顕著なものは見出されていないではありませんか。そうすると、やはり幸島のサルの行動には、人間の影響が強く働いている。強いていえば、人間との接触があったからこそ生じた、といっていいのではないかと思います。一般的にみて、今日ほど人間がいたところに住み、これほど地表を改変している状況の下で、野生とか自然状態とかいう場合にも、多かれ少なかれ人間の影響を考慮する必要がありそうに思われます。特にわが国のように人口稠密な島国で、野生といわれるニホンザルの生態に、人間とその作っている環境が、直接間接に関与している度合いはどんなものでしょうか。分布にしても、下北のように酷寒の地にすみつくようになったのは、何か人間との関係がありそうに思われます。

最近チンパンジーが肉食をするということが報告されて、私どもの教室の西田君もその目で見たといいですから、事実であることに間違いありませんが、私はこれにも人間の影響があるのではないかと、ひそかに考えています。チンパンジーの行動地域の中に土人の部落があれば、土人とチンパンジーが行きあう機会も少なくないとき

いています。チンパンジーは人間に対して強い好奇心を示すそうですが、そうなるとうまう人間の行動に触発されて、チンパンジーが肉食をするようになったのではないか、という疑いをもつのです。

そのような疑いは無用ということが分ればそれでいいのですが、真相というものは、その気で見ないと分らないことがあるものです。

チンパンジーが本来肉食をする習性をもっていたかどうかは、人類の進化を考える上に重要な意味をもってい

るだけに、是非真相を知りたいと思っています。

人類の象徴たる知恵を宿す脳と神経の研究は、時実先生がよくいわれるように、人類を理解する上の中心課題ですが、今回の講演からも複雑で難解な対象であることがよく分ります。言語・コミュニケーションの部でも、「脳のはたらきと言語」という講演がありましたが、今後もホミニゼーションの研究会が続けられるならば、いつかまたさらに別の角度から脳神経の問題をとりあげるのがよいと思います。